
何かのために、誰かのために ~証~

飛亜乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

何かのために、誰かのために（証）

【Zコード】

Z0752Y

【作者名】

飛亞乃

【あらすじ】

ある日、突然強引にAPTX4869の解毒剤を要求するコナン。その時に浮かべた違和の残る微笑みをきっかけに、彼の暗闇は幕を開けた。誰も、想像すらできないその理由とは何なのか…？

1人で2人。その事実はいざれ…………。

ベースは、コナンです。新一は度々出てきはしますが、飛亞乃の小説は主に小さな探偵君が主になります。シリアルズです。よかつたら、ご覧ください。

解毒剤（前書き）

連載です。

久々の新作になりました。
また、不定期的更新になりますが、申し訳ありません。
よろしくお願いします。

解毒剤

『そんな、強い人間だと思つてんの?』

ただ耳の奥に「びりりりりりり」、彼らしくもない自嘲めいた声。

本氣で、彼が偽物なのではないかと疑つた。

それを否定してしまつたから……

彼は、本当のフュイクを身につけてしまつたのかもしれない。

「だーかあーらー。解毒剤の試作品、くれって言つてんだよ」

目の前でモノをよがるように、ぶんぶんと手を振り、何度も同じことを繰り返す。

「しつこいわね、黙目つて言つてるでしょ?」

「んでだよ、万が一のために無いと色々と不便なんだよ、分かるだろ」

何が、分かるだろ、なのだろつか。

…受け入れられるわけがない。

小さな科学者は、盛大なため息を吐いた。

「あのねえ、あなた忘れかけてんじゃないの? アポトキシン4869は、とんでもない毒薬なのよ。そんな薬の解毒剤をホイホイ渡すわけないでしょ」

「それだから、万が一の時だけって言つてんじゃねえかよ」

「あなたの万が一つで、日常茶飯事にならかねないじゃない。乱用なんてしてみなさいよ、死んだじやうわよ、あなた」

脅しでもなんでもない、本氣の忠告だった。

さすがに、口ナンも黙り込む。

「……3錠は?」

「まだ欲しいがる気?」

怒氣を含んだ息を吐きながら、睨んでみたものの、確かに少しだけ気になることがある。

こんなじつじへ、解毒剤をよがるなんて、今までなかつた。

ひょっとしたら、本当に何かがあるのでうか。聞いてみよつと思つた。

「そんなに欲しいがる…理由があるわけ?」

「…まあ……言えないんだけどな」

そうじつて、スッと視線を逸らした。

理由が言えないだなんて、どうこういつもりかしい。やはり、彼女が
らみ? それとも……

事件だらうか。

「…一応、聞いとくけど、あなたそんな解毒剤要求してくるねど、
体の負担、耐えられるの?」

「え…ああ……。確かに、きつこいつちゃきつこけど、そんなでもね
えよ。つか、そんなこと聞いてくることは、くれんの?」

「2錠だけね。ただし、継続時間とかまだよく分からぬから気を
つけて」

サンキュウと言つて、それを受け取つた彼は、微笑み、錠剤を握り
こんだ。

……これから、行つことのために……。

何者なのか…何を纏つかのか…（前書き）

今回は、今までにならないタイプの小説の綴り方、していきたいと思います。

感想をくださいの方、ありがとうございます。

何者なのか…何を隠すのか…

阿笠邸を出て歩いていたはいいものの、2錠しか貰えなかつたのは、少し痛い。

足つるだらうか。

どう、やりくりすりや いいかなあ…………。

ふと、スニーカーの先端に視線を当ててみた。

今から、俺自身がすることの真意を知つてるものは誰もいない。

誰一人、本当のことを知らない。

俺だけが、俺だけが、知つていること。

確か、持続時間分からねえんだつたなあ。

過去にあつたのは、24時間とか、4時間とか…それくらいは持つたな。

ギュッと、ポロシャツを掴んで、大きく息を吐いた。

瞳を、伏せはしない。

伏せたら、また鮮明に、甦る。

そう…。誰も知らない、誰にも言えない。

たつた一つの事の終末までの、幕。

それを今、開こう。

眩しそぎて、見つめることのできない太陽が、背中を突き刺していく。

そこから零れる影に、笑顔を隠してしまつよつに、眞実」と覆い隠してもらおうか。

決して、後ろだけは振り返らないように、ゆっくり、ゆっくり、歩きだした。

「あーあ。コナン君、まだどうか行っちゃったあ

居間の机に頬杖をつきながら、さりとてしたロングヘアを指で弄んだ。

退屈のあまり、明るい笑い声を発す箱をよそに、ため息をついてしまつ。

『蘭姉ちやん、行つてくるね』

なんて、笑顔振りまいて行つちやつたけど、せつかくの休み、一緒に過ごしたかつたな。

それに、ここ一週間、コナン君家にいなし。

毎日毎日、夜遅いし、週に3泊は、博士の家でしたような…。

なんなかしら、ホント。

もつ一度、溜息を吐くと、蘭は立ち上がつた。

ふと、机の下に小説を見つける。

「これ…コナン君のかな。…うわあー…」

開いた瞬間、推理小説だと分かつた。

こんな小説ばつか、よく読めるなあ。ずりゅりと並んでいるのは、細かい文字。

ていうか、分厚い…。普通、こんな小学生が読まないよねと苦笑してしまつ。

でも、きっと彼は普通じやない。

あんな小さな子供が、あんな大きな包容力を持つてる。

いいところ上げていつたら、キリがないし…。

ほんと、新一にそつくりなんだから…。

でも、本当に、「コナン君は…何者なんだら?」

「あのー…佐藤さん。コナン君って、何者なんでしょう」?

今日は珍しく取った休暇。久々に誰にも邪魔されず、一人ゆっくりできていた。

視線を運転手に這わせ、眼を見開いた。

「あらなあに?」こんな日に、堅苦しい会話ね

「すみません…。でも僕、ずっと気になつてるんですよ

異様に真面目な高木の顔に、美和子も眉を寄せた。

「確かに変わった子よねえ。事件現場に遭遇しても、全然怖がらないし…、頭良すぎだし」

「でしょ?」

高木は、前の道路を見つめながらも、あの日のことを思い出していった。

東都タワー。ド真ん中のエレベーター。時限爆弾。1200万人の人質。水銀レバー。

その爆弾を次々に解体していった。

そこに唐突に現れた悪魔の言葉……。

『勇敢なる警察官よ……。君の勇気を称えて褒美を与えるよう。試合終了を彩る大きな花火の在り処を……。表示するのは爆発3秒前・健闘を祈る』

あの3秒間で、彼は答えを導き出した。

普通なら、怖がるだろ？ 爆弾だなんて、それで死ぬだなんて……、嫌だつたろう。

それなのに彼は……。

あれから「ナン君は、ただ者ではないと認識した。

そして、彼は言った。

「いるかもしれないんだ……そこにはこの世で一番死なせたくない大切な奴が……」

だから、問いつしまった。

何者などと、君は、一体何者であるのか。知りたくてたまらなかつた。

だが彼は、結局教えてはくれなかつた。

知りたいのなら……教えてあげるよ……。あの世でね……

あんなこと、7歳の子供が言つわけがない。

何を隠しているのか。

日々を過(じ)しながら、何をしたがっているのか。

あの姿の裏に、一体どんなものを抱えているのか、知りたい。

知りたかった。

ふうと吐いた息が異様に白く見えた。

冬でもねえのに、変なの。

……はあ、ともづ一度ため息を吐いた。

ずるつと、滑るように壁に寄りかかってみる。

よへ、こゝまで……抑えてきたもんだと、自嘲の笑みを浮かべる。

ふと、顔の前で手を広げてみた。

ずっと、否定し続けてきたことなの……

それを、俺が自ら行うことになるなんて……思つてもなかつたな。

誰も予測すらできなかつた。『今』がここにある。

俺だつて、想像すらできなかつた。『今』がここにある。

……後ろは見ない。なぜなら……

今さら、後ろを振り向いたら、俺は……あつとまた、あの日に突
りたくなる。

あつとまた、この選択を、やり直したくなる。

そして、『これから』をおこなつてしまつたら……

そこから、『今』という過去を振り返つたら、……俺は、死ぬほど後悔するだろ？。

だから、前だけを見るという選択をとつた。

何も知らない他人は、前向きだと称えるかもしない。

だが、違う。

前だけを見ることだけが、正義じやない。

過去も、今も、全て受け止めて、ちゃんと理解したうえで、反省も悔いも抱え込んだ上で、食い破り、足を踏み出す。

それが本当の、前を見るということを示す。

ちゃんと知つてる。

だから、俺が今している「前を見る」という行為が間違つてることくらい、分かってる。

いつか、こんな日が来るかもしれない……

そうやって思つてきたことが、いよいよ現実になつたつてわけだ。

俺も……、人間つてことか。

「あれ…。名探偵？」

その声に、ハツとして、顔を上げた。

こんな真面目に、白いシルクハットとマント。光を持つ瞳が、じつといひやらを覗き込んできた。

「キッ…キッ…？」

「「」答。そりやあ分かるよな。こんな格好してゐる俺しかいない
し…」

田立つよな、ヒハイカミ笑顔を照らしながら顔を向けてきた。

「眞間から」んなと「」で、ひひひゅうして、中森警部」と「」突
き出すぜ」

フンと、先ほどの自分への嘲笑の余韻を用いながら、鼻で笑った。

「んだよ、そつけねえなあ。眞間から、ギャーギャーしたおっさん
達に追いかけるなんて嫌だ。追いかけられるなら、美女がいい？例
えば、お前の彼女とか？」

「ぶつ飛ばすぞ」

一気に「ナン」の田が鋭くなつたので、キッドは冗談だよ[冗談、と彼
をなだめた。

そして、そのまま「ナン」の田線までしゃがみ込んだ。

「で、や」

「なんだよ」

いきなり、すいすいと顔を近づけてきた奴に、少し慌てる。

「お前、じつしたの?」

「ナンは、思わず息をつめていた

さつきまであつた軽やかな空気は、こいつの間にかどんむなくなつていたからだ。

「…じつむじねえよ…」

「じつもじねえわけねえんじゃねえの?」

やはり、真剣な瞳は貫いてくるばかりで、決して揺れない。

そこから、絡み合つ視線を外したくなる衝動が、胸奥からもぐもぐと湧ってきた。

「なんで、テメエがそんなこと勝手に決めてんだよ」

「壁に、ずるずるともたれかかったまま動かないし、思いつめた顔してたぜ」

「…そんなん、別に休んでただけだろ」

「……ふーん、あつそ。別に俺は名探偵が何で幽んでてもどりでもいいんだけどね。でもわ……それなら、俺がこいつやって心配しちまつべらーいの表情を、晒すなよ」

「んな顔してねえだら。てめえのただの思い込みだぜ、そんなもん」

「俺が?……お前を」

「ダンツー!と鈍い音が耳の隣で鳴ったと同時に、白い手袋で覆われた拳が横目に入った。

「ナメてない?俺の!」

「…………」

「俺を、そんじょかひこの泥棒と比べんなよ。…………それにおめえの旦」

「…………」

「逃げたくて堪らないって、揺れまくってるぜ」

「そういった怪盗に頭には、もう怒りを含んだ威厳とはなくなりました。」

「……適当なこと……言つてじやねえ」

狭い空間の中、腕を投げるよう振って、すぐ横にあったキッドの手を大きな音を立てて、払った。

「……さけんな。勝手なことばつかぬかすなよ。ナメテんのは、テメエの方じやねえのか」

まるで怒りを散らすのを堪えているかのように、その口から発される声は震えていた。

そんな彼らの足元を、遠慮がちに風が吹き抜けた。

「やーい、どけよ。テメエ怪盗だろ。探偵なんか心配すんな

「……知探偵……」

「なんで……お前なんかに、俺が心配されなきゃいけねえんだよ。……まあでも……」

そのあとで、呟いた言葉は小ささざさかる声のせいで聞き取れなかつた。

「え、何？」

「……別に。てか、どけつづってんだ。邪魔」

どつくよつこ、そこから脱し、コナンはすれ違い追い越すようにキッドの視界から外れた。

「……じやあな、コソ泥さん

そういうて振り向いた探偵の顔が、微笑んでいたことを怪盗は知らずにいた。

前を（後書き）

今回は、読者の皆様にも、コナン君がどのよつなじとを隠してこらのか、内緒できな感じで進んでゆきます。

心情とかは述べますが、彼自身が何をしようとしているのかは秘密です。

予想できますぞしじょうか。

会いに来た理由

いい天気やなあ、なんて呟いてみた矢先、ポケットに入れた携帯電話が鳴動した。

誰やろか。そう思いながら、携帯のディスプレイを見ると、そこには【工藤】とあった。

ここ最近連絡を取つていなかつたあいつから掛けてくるなんて、事件がらみかと思い電話ボタンを押した。

「はい、服部や」

「うふ。俺工藤」

「知つとる。ディスプレイに表示されるとるからな、お前の名が」

「俺の名ね…」

「なんや?」

「や、別に。んで…お前…来週あたり、休日家にいる?」

「せやなあ。事件とか入らな、いるで」

「やつか」

心なしか彼の声が低くなつた気がして、訝しげに眉をひそめる。

「なんですか？」

「……どうつか迷つてゐるといふ。ま、気が向いやへん」

気が向けば、とは。随分、気分屋な奴だ。

「ちよか。ま、いこわ。来るなら来るで、歓迎するで」

「ああ。サンキュー」

会話は途切れたし、話もまとまつたのに、何故だか珍しく電話は切れなかつた。

まだ、何があるのだらうか。

「……H藤? どうかしたんか?」

「ああ、服部……」

「なんや?」

先ほどよりも短い沈黙が一瞬、流れた。

「お前や、もし俺が……」

「?」

「……いや、やっぱりなんでもない。もし、なんてくだらねえしな。気にすんな」

「はあ？なんや自分。そのテレビの次回予告みたいな氣になる話の区切り方やめえ」

「悪かつたつて。んじゃな」

突如切れた携帯電話を見つめながら、服部は呆れたため息をついた。

もし俺が……

あの言葉の続きを、工藤は何を言おうとしたんやろか。

なんでもない、じゃないだろ？

何があるはずだ。…………気になつてしまふがいい。

あの言葉の続きを、聞ける口は来るのだろうか。

あちらが喋りたがらないのに、無理に聞き出さんは多少気が引ける部分もあるけど、勝手に心にわだかまりを作ったあっちが悪いんや。

……絶対聞いたる。

そう決心をすると、手で包む携帯を、ぐっと握りしめた。

変な切り方しちまつたな…。

無駄な後悔、といつのか。もしなんて、仮定の話などしなければ良

かつたのだ。

あのしつこい色黒探偵のことだ。

絶対、問い合わせてくるだろう。

その時のことを、想像するだけで氣だるくなる。

だが、まあいい。

今までそうしてきたように、「はぐらかす」とは得意分野なのだから、なんとかできる。

「あーあ……なんで、こんなことになつたかな」

何よりの、発端は……

俺が2人で、1人になつたトキ。

俺という人間の中には、2つの命が灯っている。

そのことを、軽く考えていた毎日は、もうない。

そんなこと出来なくなつた状況に今俺は、置かれているのだから……。

不可抗力。

とこう言い訳は存在するのかもしれないけれど、所詮言ひ訳は言ひ訳だ。

たとえ、八方塞がりといつ理由があつても。

どうせ、後に残る結末も知れている。

絶望と自分に対する不信が、一気に覆いかぶさるんだらう。

結末に至つたら、楽になれるかもしれない。

だが、それは…極刑。

信じられないほど、傲慢で、許せざる選択。

要は、自分で最低な行為を行い、自分で最悪の刑を用意するだけだ。

いや、刑は、用意されている…のかもしれない。

その前提事項が無ければ、こんな計画立てもしなかつたろう。する必要もなかつた。

でも、もう俺の力じやどうしようもない。

決めたから……だから、解毒剤も貰つた。

一度、息をつき、弱音を吐きそつてなる口を必死に閉じた…。

1週間後、大阪にやつてきた頃には、もつねは星をまばらに輝かしていった。

なかなか、躊躇いを消すことができなくて、気付いたらこんな時間になってしまったのだ。

いるかな、服部…。

腕時計を見ると、短針は7を回っていた。

いつもと容姿が違うせいか、街灯に照らされる影が長かった。

確かに、この辺りだったはずなんだけど…と、周りを見渡すと服部と書かれた表札を見つけた。

あつた、じいだ。

ひとまず、辿りつけたことに肩を下ろす。

「…」「

呼び鈴を鳴らすと、案外すぐに田的の人物が出てきた。

「今、行きますー」

まだこちらの姿に気が付いていないのだろう。大阪弁のアクセントが目立つ敬語で、こちらに駆け寄ってきた。

勢によへ、田の前にあつた引き戸が横に開かれる。

「はこどりひやわ……」

田の前の顔を見た瞬間、平次の表情は驚愕に変わった。

「……へ……べい……？」

「　　ああ」

そう。呼んだ相手から帰ってきた声は、まぎれもなく工藤新一当人のものだった。

「……へ……へ……おお……戻ったんかーー？」

「いいや、一時的だよ。試作品…飲んだだけだからな

「や、さよか…。つどないする、家、上がるか？」

平次が驚きを引き摺りながら、提案を持ちかけると、新一は首を横に振った。

「別のとこがいい。近くに、公園とかねえの？」

「え? あ、せやなあ…。つん、ちよつと工藤といいで待つとけ。足、持つてくるわ」

「足?」

「バイクやバイク。歩くとわざと時間かかるんや」

「あ、そういうこと。悪いな」

「ええつて」

足早に服部はその場にバイクを持ってきた。

「ほんなら乗れや」

その言葉を聞いて、頷き、後ろに跨った。そして、特に言葉も交わさずに、2人は黙々と目的の場所に向かった。

なんの変哲もない公園だった。

ただ、暗闇の中で設置された街灯に光を授かつた遊具や木々が綺麗に見えた。

適当なベンチを探しながら、新一はそういうやさ、と呟いた。

「バイク乗りながら、思い出したんだけど、この前奈良だったか京都だったかで、お前が寺で最後剣で犯人とやり合った事件あったじゃん」

「…ああ、そういうやああつたなあ。それがどうかしたんか?」

「んでも、オメエ一回犯人に弓で狙われた後、バイクで交通法思いつきり無視つて、犯人追いかけただろ?」

「え…あ…あれなあ……」

横田で見やると服部は、思に切り顔を極めていた。

「 やつは、色々あつたんだ？」

「 色々あつたなんでもんやなかつたわ、ま、並然免停へりつたやう。それくらいこはまああるやう思ひつたからわざじくせとかつたんやけどな？ わのあとがや」

「 わのあとへ。」

「 親父にじぶん叱られるわ、おかなにもやたらと言われるわ、散々やつたんや。犯人追いかけるんじ、いちじちそんな先のこと考える余裕ないつちゅうんじや。 もー… ほんま、あらもつ一度と勘弁やな」

「 わつや怒りやれぬつて…」

なんて苦笑してみれば、笑い事じやないでつてジト田で睨まれた。

「 悪じ悪じ」

「 ま、ええかい。 わこや、工藤、じつに来た理由なごやつたんや？」

思こ出したかのよつて、元気いっぱい首を回した。

「 も… 今回せや、特に理由あつたわけじやねえんだ。 今ひとついつじ、思ひしわ…」

「 今ひとついつじ… なんぢやねえ？」

一度、新一は俯いた。前髪で顔の上半分に影が出来た。

だがすぐに、平次のではなく、ただ真正面の遠くを眺めた。

「…………工藤新一は、これから殺されるからさ…………」

……その言葉に呼応するかのように、あたりの木がざわりと蠢いた。

殺す者～本当の理由を知る者～

隣の存在が、何を言つているのか分からなかつた。

工藤新一は、殺される？

「何…訳わからんこと…畜生でんねや…お前が…そない簡単に、殺されたりするかい…」

「もう…どうしようもねえんだ…。どう抗つても、工藤新一が死んじまうことは変えられない。逃げたつて、変わらない…なぜなら、そいつが出てきた時点で、今の俺は消えるから…」

「は…？」

「……………やつ…。工藤新一を殺そうとしてるのは…、もう一人の俺である…」

江戸川コナンなんだよ…………

言葉を失つた。余計に訳が分からなくなつて、驚愕で田を震わし、見開くことしかできなかつた。

江戸川コナンが、工藤新一を、殺す…………？

「ほんま…訳、わからへん…なんや、それ…。第一…お前探偵やろ…！そんなお前が殺すなんて…」「分かつてん…！」

言葉を遮るよつて、唐突に叫んだ工藤に、思わず息を呑んでいた。

「……分かってるやつ！探偵の俺が……殺人なんて、ありえねえってんだろ……!? 探偵と真逆の犯罪者……ずっとそれを否定してきたつ……そんな人間がつ、殺人を犯すことになるなんて、俺だって、俺だって信じたかねえよ……！けど……つ、どんなに否定したつて、拒絶したつて、もう免れられなくなつちまつたんだから…………」

新一は荒ぶる口調のまま、自分の体を抱きしめるよつて、左手で右腕を強く掴んでいた。

服部は、混乱していた。

彼が苦しんでいるのも、辛いのも分かる。

でも、理解も納得も、うまくできなかつた。だから、彼の今の抱えてる事実を整理したかつた。

「……落ち着いてや、工藤……そうしてくれんと、俺も……よく分からへんねん……、せやから、もつと落ち着いて……」

「……落ち着けるわけねえだろ……つーどつやつて落ち着けつてんだよつー逃げることもつ、田を背けることもできなくなつちまつた今じやつ、もつひづりよつもねえんだつ……だけどつ……」

そこで新一は口を噤んだ。暴れる感情を無理に抑え込んだのが、平次にも伝わった。

「…………悪い、やうだよな…………。何もこひなんじや、分からねえよ

な……なのに俺、叫んだりしまつて……」

必死に平静を装ひ回し、年の少年を見たまま、辛せり平次は眉を寄せた。

工藤新一が、江戸川コナンによって殺される。それによつて、彼は苦しんでこる。

そして、工藤新一は一度といなくなるところだ。

つまり……

「…………工藤、もしかしてお前…………体に耐性できてもうたんか……？」

図星だと思つた。だから、神妙に告げたのだ。

だけれど、工藤は驚いた顔つきをするととも、辛せりに顔を歪めることもしなかつた。

ただ、どこか辛せりに睫毛の影によつて更に悲しみの色を濃く瞳に宿したまま、微笑んだだけだ。

「耐性…………とは、少し違うのかもしれねえな

「え……？」

「薬が効かなくなつたんじゃなくて……、これ以上薬を飲んだり……。いや、やつぱ向でもない。つまり、まあざつと言えばさ、この姿で会えるの、……最後になつちあつだらつから……間に合わなくなる

前に、お前に会つとあたへて…。 本当の姿でや

前に、お前に会つとあたへて…。 本当の姿でや

本当の理由を打ち明けられないのなら、せめて本当の姿だけでも晒しておきたいから。

だから、ここに来たんだ。

「……」 そういふやく新一は平次を見た。そして、ここに来て初めてちやんと笑つた。

「…じや あな」

「ちよ、待ちこいや——藤つ。今から帰るんか？それにこれ以上薬飲んだらつて…」

「帰るよ、まだ8時だし。全然東京行きあるだら。あと、さつきの言葉も、気にすんな。わりいけど、服部とちまで送つてくんね？これからじゃ、駅までの道分からねえんだよ」

……同じだ。

またいつもなる。前だつてそうだつた。

電話の時、『もし俺が…』の後に、さぐりかすよつて氣にするなど言つたのだ。

どつしてだらうか。

何故、肝心な部分だけはぐりかすのだらう。

同じ探偵のこの俺に、ここまで違和を感じさせておいて、またはぐらかすつもりなのだろうか。

「…ふざけんなや」

「えつ…？」

服部はベンチから立ちあがった新一の腕を強引に引っ張り、再びベンチへ叩きつけるように戻した。

背に相当の衝撃が伝わったのか、瞬時小さくなづめき声が彼の口から洩れた。

一方服部は、それと同時に立ちあがり無理に座らせた新一の前に立ち、その胸倉を掴んだ。

「つどいまで、ばぐらかす気なんや！」

もうこい加減にしてほしい。

大事なことを、重大なことを何も知らされないまま、中途半端に事実を知られ聞かされて、彼の本当に思っていることすらはつきりと分からせてもらえない。

そんな中途半端で、いい加減な状態のまま、放置され、知るなど、気にするなどいう言葉で勝手にくぐられるなんて、『冗談じゃない』。

きっと、俺がそう思つことは藤にだつて分かるはずだ。

だから余計に腹が立つた。分かっていて、知っていて、それでも尚騙しばぐらかそうとするさまだ、我慢ならなかつたのだ。

「ずっとひやうやって、自分で分かつた顔なじるつもりなんか！んな、アホな真似、ずっと続ける気なんか！？そない事しつても、いつかはバれるんやぞっ！」

新一は胸元から締め上げている手を外そつと、その手に強く指を食いこませた。

手首に強い痛みを感じた平次は反射的にその手を放した。

首元を解放された少年は開いた氣道に空氣を吸い込み、咳き込む。

その咳をなんとかおさめて、鋭い目で目の前の相手を睨んだ。

「……………バレねえよ」

あまりにも強く激しく揺れる眼光に、彼の前に立ちはだかる探偵は言ひ返す言葉を見つけられずにいた。

「バレちまう程度のことなんて、抱えてるわけねえだろ。お前にも、誰にも、本当の理由なんて知ることなんかできるわけねえんだよ」

威圧感を纏うまま、勢いよく立ちあがると服部を思い切り押し退け、暗い闇の中に消えて行つた。

ポツンと佇むベンチの前に残された服部は、ただ漠然と、その背中を眺めることしかできなかつた。

殺す者へ本当の理由を知る者へ（後書き）

また良ければ、感想や意見、いただけると嬉しいです。

抱えてくるものの大それ

びつやつて、ここまで来たのか分からぬ。

気づいたら、工藤邸の前に一人、街灯も消えた真夜中に、立っていた。

でも、ずっと、ずっと、服部の言葉が頭にこびりついて消えなかつた。

ずっとそつやつて、自分で分かつた顔しとるつもりなんか！んな、アホな真似、ずっと続ける氣なんか！？

…つもりなんかじやない。分かつた顔してゐわけじやない。

俺だつて、分からぬことだけだつた。戸惑いだけだつた。

そのまま聞いていたり、せつかく目を反らして決心した過去が、今が、揺らぐ氣がした。

簡単に決めたことじやなかつたのだ。だから……あの場から逃げてきた。

今、自分の胸のうちに在ることは、さうと打ち明けられるもんじやない。

説明だつて、上手くできるか分からぬ。

“どこのままでござります氣なんや！”

……どこまでだらうか。永遠なんてない。でも、俺には到底予想できない未来までは、きっとはぐらかしてはいるんだろう。

だが、一瞬自分に詰まっている事実を掘り出されとしてくるあいつが怖かった。

そして何より、瞬間的でも、この口から眠る事実を紡ぎやつこなった自分が怖かった。

だから手遅れになる前に、口を噤んだ。

自身の内で暴れる獣猛な感情も、事実も、抑えなきやいけない。

…………どうしても、言いたくない。

そう思つた刹那、もの凄い鼓動が鳴つた。

ぐくんっ……！

唐突な苦しみと痛みに反応しきれなかつた体が、門に当たる。がしゃんといつ音を立てて、俺の体はその鉄の柵をずるずると滑つた。

ここでは元に戻れない。

その本能が、異常な汗を噴き出す体を無理矢理動かして、なんとか玄関に転がり込んだ。

だがそこまでが限界だつたらしい。

異常な熱。激痛。それらが身体を蝕み、拘束するように縛め付けていた。

骨が溶け、身体が縮んでいく。そんな奇怪な感覚が全身に走る。

耐え切れず漏れた悲鳴とともに、その姿はもう一つの姿に化していった。

半端でないダルさを残す身体を起こしてみた。

先ほどまであったものとは比べ物にならないほど、小さくなってしまった手を天井にかざしてみる。

「やつぱ……もつ一件分は……持たなかつたか……」

呟いた声が暗い空間にのみこまれてしまふを感じると、乾いた笑いを零した。

大丈夫……。

まだ、いける。いけるはずだ。

次が、最後のチャンスになるだろうけど……。

汗がしみこんだ布を纏いながら、俯いた彼の額からは、一筋の滴が垂れていた。

隣の家からなんだか一瞬、がしゃんといつ音が聞こえた気がして茶
髪の少女はふと身を起こしていた。

こんな夜中に…何かしら?

気のせいかとも思つたけれど、やはり一度疑つてしまつたことを抱
えたまますんなつまた眠りに付けるほど、素直な性格ではない。

隣のベッドでごびきをかき眠る博士を起しきれなつて、やつと部
屋を出て、静かに家を出た。

しかし、そこには特に何もなく、静まり返るこつもの夜だった。

それに少し安堵し、再び家の扉を閉めた。

しかし一度覚めてしまつた頭。すぐに布団で寝息を立てるのは難し
い話だと思った哀は、紅茶を入れたカップを持ち、ソファーに座り
こんだ。

ダージリンの香を漂わせるそれをひとつ喉に流し込みながら、つい
最近解毒剤の要請をしてきたコナンのことを思い出していた。

試作品を試すなら、それなりに結果を報告してもうわねば困るのだ。

けど…与えた解毒剤を握りこんだとき彼が零していた微笑みがどう
も引っかかっている。

なんだろうか?

あれは、再び元の体に戻れる高揚感から来る笑みではないよつて思えた。

だとしたら？ だとしたら、一体何なのだら？ 単純な危機状況を回避するためだけではないのか。

彼が、解毒剤を欲しがる、もつと、もつと深い理由つていたら……。

あー……駄目だわ、全然分からぬ。

彼みたいに、心当たりから全てを整理して、パズルを組み立てるよう推理していくなんて芸当ができるばいいんだけどね。

よく、あんなことができるものだわ。 感心する一方、あきれることが度々あるし……。

狂おしいほど興味深いと感じる純粋な心を持った彼。

そんな彼に幾度も惹かれた。けれど、そんな純粋な心を持ちながら、多くの暗黒を持っているのだろう。

それを全く言おうとも、晒そうともしないから、さつとも分からぬのだけれど……。

無理して、無茶して、どうしようもなくなつた結果が、私たち周りの人間に刃物を向けているのと同じくらい切羽詰めになることを、彼自身、ちゃんと分かっているのかしら……。

強靭な強さや優しさを抱えていると考えていた思いを、その彼自身に壊されことになることは、まだこの少女は気が付いていなかつた。

抱えてくるものの大ささ（後書き）

また、意見、感想等あつましたら、どうぞよろしくお願いいいたします。

俺は弱い

目を開けたら、眩しい光が窓から差し込んでいた。

驚き、がばりと起き上がったが、座っている下は、冷たい床。

「ああ、そうだ。俺、昨日、あのまま意識飛ばして…そのまま寝ちゃつたんだつけ。

乾いた汗が異様に冷えたせいか、身体がだるい。寒気もした。

なんだらつか…。

元に戻つてから、『ナンの姿になるとさにあつたはずの名残惜しさが消えていた。

不思議だつた。

何より、元の姿を自身でも望んで、このままで居続けたいと思つていた。

そして、幼い姿に戻るときの悔しさは、底知れないものだつた。

それははずだつた、はずなのに……

あのとき抱えていた高揚感も、歡喜の心も、縮んでしまつたときの湧きあがる悔しさも、何一つ感じなかつた。

なんで……。ビートから、それまで変わったんだろう。

何も分からぬ。自分のことのへせに…全然分からぬ。

分かるのは、元の姿になるときも、この姿になるときも、静かな無力感と辛さがあつただけだ。

ちゃんと決めた。自分自身に決心を掲げた。変に大丈夫だという確信をしていた。

それが今は、揺らいでいる。

確信？

馬鹿馬鹿しい。確信なんて、そつ簡単に持っちゃいけないものなんだ。

確信は、ある小さな種から可能性といつもの力を膨張させてようやく出来上がるもののじやない。

そんな課程を吹っ飛ばして、すんなりと摑めるものじやない。
……何、今さら、気がついたんだ。
遅すぎるよな……。

限つある時間の中での、俺がしなくてはいけないこと。はじめづか?
……違うな。

思えば、どんな動悸だったんだろうか。

理由を曖昧にしたまま、元の姿で会つべき人間に会つて、最後だと伝えて……。

そして、馬鹿なことを盾にして、そこから自然に消えていく。

誰にも、真実を知られず、ほのかに自分で全てを終わらせる。やつしたら、最低限に抑えることができるんだ。

周りの人間に傷をつける要素を……。

どうやって考えても、無傷の状態は、無理なんだと感じた。

だったら、少しでも軽減させるしかない。

少しでも……、見る涙を、減らしたい。

それなんだろうな、きっと。

色々、怖がってるんだ。前に進めてるのかすら不明だし、曖昧だし、全然はつきりするものがない。

それなのに、明らかに、明確に、抉るよつての口元に芯に沁みこませぐることは止まらない。

少しでも振り切りたくて、立ちあがった。

ダボダボの衣服をまとい、ずりながら歩く姿は、随分無様だらう。

だが、早く脱ぎたかった。脱いで、清潔な香を余すもので、身を包まれたかった。

自分を、ほんの少しだけでもいいから、清浄化したかった。

服を着た。着替えた。今の身体にぴたりと合つ。しかし、何も変わらなかつた。

「……えりこ……」

びりこて、ちいとも変化をもたらしてくれないのだろうか。

「…………」

我に返つたいろは、頭から痛いほどの雨をかぶつていた。

瞬間の中に、思い切りシャワーのノズルを回していくらしい。

壁に手をつたわせながら、だらしなくしゃがみ込んだ。

「…………俺は…………弱い…………」

まるでそのまま葉を反響させ、輪唱してこくよみに、空気が振動した。

全ては、あれから始まつた……。

ある日、解毒剤の作用を起こす発熱と、白乾児を服用する機会があつたのだ。

事務所にはだれもいなかつたし、条件は完璧だつた。

しかし、元に戻れなかつたのだ。

いや、わずかな変化は確かにあつた。

一度、この身体は、成長を遂げていつたのだ。だが、戻りきる前に、再び戻つてしまつたのだ。

己の田を疑つた。

…………嘘だらう?..?

疑つた。しかし、感じてしまつた。

荒い息を繰り返しながら、ただ茫然となり固まつて、白乾児が僅かに水滴として残つたコップに映つた自分を見つめる。

もう、耐性ができてしまつた。

試作品を服用しすぎたのか?だけど。数回しか…。あんな数回で、もう戻れなくなつちまうのか。

まさか、そんなはずない。

ちゃんとした解毒剤じゃないからだ。そう思った。

だから、じつと灰原がいない隙を窺つて、試作品を盗み出した。

それを飲用すると、なんとか元に戻ることに成功した。ちゃんとしました十七歳の姿だった。

心底安心した。だがそこでまた、大きな違和感を感じ始めた。

元にちゃんと戻った姿の状態でも、いつも、苦しかった。

脈は速く、頭痛もあった。心臓も圧迫感が常にあった。

異常

だった。

もしかして、本当にもう、身体が持たなくなってしまったのか。

壊れかけているのだろうか。

だとしたらどうする。どうするのだ。

まだ解毒剤は試作品段階。完全版なんて、先の見えない未来にある。

だが、これ以上試作品を濫用すれば、服用者のこからが持たない。

それに、工藤新一は、失ってはならないはずの人物。俺の『本物』で、その『本物』には待っている人間がいる。

下手したら、それを裏切ることになる。

そしたら、田に見えてる。あいつが、涙を流す」と。

その姿は、その姿だけは、一度と見たくないとも思つているものの
なのに…。

どうして現実はこうなのだ。

深い絶望を味わつた。

そして、一度降りかかった悲惨な吹雪は止むことを知らなかつた。

耐性と身体で、悩んでいた矢先。

それとはまた別で、蝕まれていることに気がついた。

そう何もかもがそこにあつた。

考えれば、その大きな悪魔の軸を舞台に、悲劇は始まつたのだろう。

多分、もう一、二回での急激な肉体変化は限界だ。

しかしそれでも、ちゃんと、もう一度とそのスガタになれる未来が
なくても

その姿を望んでくれている人の前へだけは、本物の足で、歩き立ち、
話をしたかった。

その変わり、それは毒薬を服用したことにより生まれた『江戸川コ
ナン』が「工藤新一」の人生を背負つ。

つまり、後からひょっこりと表れた主人公が、本来の主人公を殺す。失くす。

…ありがちなストーリーだと苦笑する。

だけど、現実は笑えてしまうほど、軽々しいものじゃない。
でも、その江戸川コナンの人生も、随分と限界期間を迫られてしまった。

おそらく、工藤新一がいなくなつたら、あいつは…蘭は…涙を滴らせるだろう。

だから、もうそれ以上あいつに、哀しい闇を与えたくない。

殺人者になる江戸川コナンなんて、ひとつそりと消えてしまえばいい。
工藤新一と江戸川コナンが同一人物だというまぎれもない真実は押しこめる。

たとえそれが、本当のことだとしてもどっちみち、現実に見えるものは限られていく。

だったら、結局変わらない。押し込めようがどうでもいいのだ。

そう決めた。

「…それが、揺るぎない決心だ
…」

そう。
つた。

俺は弱い（後書き）

また、感想、意見よろしくお願いします。

元から存在しないもの

だけど、だからこそ八方塞がりの状態に陥っているからこそ、俺は、決めた心を動かしたらいけないんだと思つ。

工藤新一は死ぬ。

そして、江戸川コナンも消える。

その理由は、どうしようもない身体の限界。

もしかしたら、俺の命のカウントダウンは、あの妙薬を飲んだときから、始まっていたのかもしれない。

気付かなかつただけで、俺を消滅させる爆弾の起爆スイッチは入つていたのだ。

どうじよつもなくしんどい。叫んで泣いて、開き直れるものなら、そうしたい。

でもそんなことじや、今感じてる苦しさも辛さは和らげられない。

頭から突き刺していくかのような水。

それから逃れるために、そこから横にそれで、壁にもたれかかった。

とめどめなく滴る雫。それを見つめながら、瞳に膜が張り詰めるのを感じた。

そうだ。…それでも…、それでもやつぱり、限られている時間だから、今の自分でも、大切な奴のために使えることを感じたい。

それしかまともである理由がないのだから。

R R R R R R R R R R

電話が鳴り響いたのを耳に感じて、切れないうちに机の上に受話器を手に取った。

「はい阿笠です」

澄んだ少女の声を聞き取ったなり電話の向こうの相手は唐突に叫んだ。

「工藤出せや工藤！……そこにあるやうー！？ええ！？」

その騒音ともいえる大きな声を頭に響かされた彼女は、思い切り眉をしかめた。

「なんなのあなた。第一声がそれ？ええ！？じゃないわよ。ふざけないでくれる？」

「ふざけてなんかあらへん！で。工藤は！？」

「いないわよ。ここに住んでるわけじゃないんだから

と返してやれば、そんなはずあらへんと大反論。

「うるさいわね。だつたら確かにくればいいでしょー！？」

「あええわ！行つたるー事務所におらへんなりそこしかないわー！」

「うつたきりブツツと通信されていた電話は切れた。

本氣で来る気なのかしら……。

でも事務所にはいなかつたつて言つてたわね。

だからつて、今日は休日。普通、どつか行つたとか考へないのかしら。

だいたい彼の携帯に連絡すれば済むものなんぢゃないの？

それも駄目だつたつてこと？

異様に、怒つてたし…。

だからつて直接関係してない私に当たらないでほしいわね。

盛大なため息を吐いた少女は、再び眉をひそめた。

電話を切り次第、思いきり走っていた。

あの時、ただ呆然とするしかなかつたけれど、時間が経つにつれてなんだか腹が立ってきた。

バレちまう程度のことなんて、抱えてるわけねえだろ。お前にも、誰にも、本当の理由なんて知ることなんかできるわけねえんだよ。

オマエニモ、ダレニモ、ホントウノリコウナンテシルコトナンカデキルワケネエンドヨ

確かにあいつはそう言った。

つまり、自分が分かつてるとこいつ」と。

また抱え込んでいるといつ」と。

何で、あいつはこつもああなたのだらう。

たつた一人で無茶をして、抱えて、平氣な振る舞いをする。

俺は、同じ探偵だから、あいつの困惑も分かる気がする。

戾れないと言つていた。

だけれど、それだけじゃないんだと思つ。

あのあとに何を言おうとしたのだらうか。

工藤新一に戻れない。江戸川コナンになる。

江戸川コナンになるんやろ？

でも、あいつは、江戸川コナンは殺人者呼ばわりした。

でもそれは違うのではないか。

確かに、本当の姿は工藤新一なのかもしれないけれど、江戸川コナンだって、大切に思われているあいつ自身。

それをそんな邪険に、適当に、犯罪者呼ばわりしていいわけがない。

だから、それも伝える。

そのために、あいつのもとへ走っていく。

よつやく着いた。

乗り物に乗っているとき以外、ほぼ走ってきた。その為、肩が上下するほど息が荒れていた。

ノックもベルも鳴らさずに、阿笠邸に押し入ると、案の定不機嫌な顔が、こちらを見ていた。

「まさか、本当に来るとは思って……たわね、少し」

「当たり前や、俺は有言実行の大きな男やからな。で、工藤ほんまにおりへんのかい」

「だから最初からいないつて言つてるでしょ。しつこいわね。携帯は？繫がらないの？」

「繫がらん。二つちに来る途中も、なんべんもしたけどな。一つも通じんのや」

「もう…。ま、何でもいいけど、工藤君になんかあるの？」

その質問に、服部は頷いて、昨日あつたことを昨夜あつたことを話した。

それを聞いた、哀の顔は愕然としていた。

「…………どうこう…………」

その反応を見た服部もまた啞然とした。

「どうこう」とて、あんた工藤から聞いてなかつたんか？」

「聞いてる……わけないでしょ……？もう戻れないって……本当にあの人言つたわけ……？」

「あ……ああ……」

「訳、分からないわ……。絶対何か隠してゐ……って証拠よね。そうなつたら聞きださないといけなさそうね……」

もしかしてまだこの彼女に伝えるには早すぎる」とだったのかも知れない。平次は事情を話してから少し後悔していた。

でも、何かを隠すあいつが悪い。

白状をさせてやりたい。…いや、させなきゃいけない。

工藤が、隠そつとすることは、だいたい酷いことだった。

だから尚更……

。

「ねえ、ちよっと

「えつあ、なんや」

「エリにも事務所にもいないなら、工藤邸行ってみない? もしかしたら、いるかもしれないでしょ?」

「ああ……わうやな」

そして工藤邸のベルを鳴らしてみると、反応がない。

「おひくんのか~?」

そういうて勝手に侵入し、玄関の取っ手を回してみると、開いた。

「…あ

「……このつひ」となにじやない?」

「せやな……」

しかし、探すまでもなくそこには田の人物は佇んでいた。

全身びしょびしょで……

。

「……え……何でおめめり……」

「う……あなたじゃ、どうこういつわらなのー?」

いきなり隣で叫んだ茶髪の少女に、じゅりが驚いた。

「どうこういつて……何が、だよ……」

「とほけないでつ……つどうこういつの意味なのよー……もう戻れないつてー!」

その言葉に、コナンの口は大きく開かれた。

「なんで……オメエが……それを……」

「すまん……」藤

謝った服部に理解したのか、彼は舌打ちをした。

「余計なこと……言つてんじやねえよ」

「なんで早く言わないの…。耐性ができなかったってことなの…？」

「…やうなんじゅなーの」

「ちよっと…何でそんなに投げやりな態度ができるのよ…？それが出来てしまつことは、あなたの本来の姿が失われる」とになるのよつ…！」

「つ…。分かってるわ、そんなこと。俺だって、馬鹿じやねえんだから、それくらいすぐ分かる。でも、色々悪運重なつちまつたし…？それに、これは俺の問題だ。オメエにだつて関係ねえよ」

「…なあ工藤…やっぱお前、それ…変とかやつか…？」

「ぽつりと呟いた服部は、首を傾げるかのように工藤が視線を向けてきた。

「お前…前、自分の」と…工藤新一は、殺されるていつた…そして、殺人者になるのは江戸川コナンや…やつはつたよな

「…ああ」

「やっぱそれ…絶対おかしいと思つんや。…なんや、俺から見てるじ、お前、自分自身の中にある江戸川コナンを邪険に扱いすぎに見える…。江戸川コナンにやて、大切に想つてくれる奴いつぱいおるんとかやつか…。工藤新一と、回じよつ…」

心を抉るような感覚が頭を突きぬけた。

ずっと頭の奥底で引っかかっていたことだった。

「……るせえな……！だからなんだよ！テメエに何の関係もねえだろうが！つ江戸川コナンをどう扱おうと関係ねえよ！俺の問題だつってんだろう！」

「ぐビ……」

「コナンが誰にどう想われてもつ、所詮コナンが工藤新一の中での偽りの人生でしかないことには変わりはない！江戸川コナンなんて、元々いないんだ！」

全身が濡れて、どこから水が滴っているかなど分からぬはずなのに、蒼い光が灯るそこからは、ただ一点伝う者が見えた。それは、ただの水でしかないのか、涙であるのかは分からぬ。

「そんな奴、どこでどう扱われようがどうだつていい！だから最初から時間を決められた！いちゃいけないはずの存在が、いるべき存在をもみ消すことになるんだからつ……つ誰にも言いたくねえ！言つたら、また誰かが暗闇を背負う！つもう俺はつ……俺のせいで流す涙もつ、無理に笑う姿も見たくないつ！」

「……工藤君……」

「つ一度と嫌なんだつ……！俺が無茶するとかつ、みんな言う！でもつ、本当に苦しんでんのは俺じゃないつ……みんなの方じやねえかつ！服部だつてつ、灰原だつてつ、蘭だつて……俺が何か聞いたつて平気なふりをするつ……辛くて、言いたいことあるばずなのにつ、黙つてるじやねえか！」

叫び続ける所為で、コナンの声は枯れしていく。でも、それに構わず、とどまらない心情を言い続けた。

「その原因を作ってる俺がつ、これ以上原因を作る様な真似、できるわけねえだろうが！」

だから、どんなに聞かれても、聞われても、気付かないふりをして、逃げてきた。

「たとえその場のオメエたちの雰囲気に押されて、知りたいからとせがまれて、口から本当のことを話したとしても、改善されたと思うのは、その時だけつ……時が立ち、ちゃんと事実に直面したその時、オメエらがどんな顔をするのか目に見えるつ！　その場の感情に流されつつ、後に死ぬほど後悔するのだけはつ一度と嫌なんだよつ……！」

好奇心という名の一時の感情にせがまれて、取り返しのつかない偽りの人生を送るようになってしまったときのようないいだけは、もうしたくない。

「嫌なんだよつ……！」

必死だった。

だから、これで一人に納得してもらえなかつたら、もう後がない。

そう思っていた。

反論を浴びるかもしない。

呆れたように、踵を翻されるかもしない。

でも、これ以上聞かれたくはなかつた。

しかし…

「工藤…………お前、優しいなあ……」

実際に開かれた口から出されたのは、予想も想像も絶するものだつた。

元から存在しないもの（後書き）

文章構成つて難しいですね。

また感想等よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0752y/>

何かのために、誰かのために～証～

2011年11月17日19時58分発行